

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第97集

みまたじょうほくとうくるわあと

三俣城北東曲輪跡

国営都城盆地農業水利事業前方ファームポンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター 第97集 三俣城北東曲輪跡 正誤表

誤	正
P24 図版8 写真上右 14	19
P25 図版9 写真上左 19	14

序

宮崎県教育委員会では、国営都城盆地農業水利事業前方ファームポンド建設に伴い、平成15年度に農林水産省九州農政局都城盆地農業水利事業所の依頼により北諸県郡山之口町所在の三俣城北東曲輪跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡のある前方地区は南に三俣城本体、北西に南方神社があり、北北西に2kmほどのところには王子城跡が、東には俵ヶ城跡がみられます。

本遺跡では、16世紀を中心とした遺物が出土し、土塁等の遺構も検出されました。三俣城の全体像を解明する一助になるのではないかと思います。

山之口町内では約十年ぶりの発掘調査であり、地元の方々の関心も強いものでありました。本書が学術資料として、または学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた農林水産省九州農政局都城盆地農業水利事業所、山之口町教育委員会等の関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成16年12月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮園 淳一

例 言

- 1 本書は、国営都城盆地農業水利事業前方ファームポンド建設に伴い、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した北諸県郡山之口町大字花木所在の三俣城北東曲輪跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、農林水産省九州農政局都城盆地農業水利事業所の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地における実測図の作成、写真等の記録は柳田宏一と玉利勇二が行った。
- 4 空中写真については（有）スカイサーベイ九州に、地形測量については（株）南洲基礎地質コンサルタントに委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成・遺物実測・トレースは整理作業員の協力を得て、柳田宏一が行った。
- 6 土器の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。
- 7 本書で使用した地図は第1図が国土地理院発行の5万分の1図を、第3図の三俣城跡周辺地形図は山之口町発行の都市計画図を基に作製した。
- 8 本書で使用した方位は座標北と磁北である。座標北を用いた場合は「G.N.」、磁北を用いた場合は「M.N.」とした。座標は国土座標第II系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SG…道路状遺構 SH…ピット SZ…不明遺構
- 10 本書の執筆及び編集は柳田宏一が担当した。
- 11 出土遺物・その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第II章 調査の記録	3
第1節 位置と環境	3
第2節 調査の概要	7
第3節 遺跡の層序	7
第4節 遺構と遺物	8
1 遺構	
(1) 土塁	8
(2) 道状遺構 (SG1)	8
(3) 焼土と遺物を伴う硬化面 (SZ1)	8
(4) ピット (SH1~6)	8
2 遺物	
(1) 土師器	10
(2) 青磁・白磁	11
(3) 縄文土器	11
第5節 まとめ	16

挿図目次

第1図 三俣城北東曲輪跡周辺位置図	2
第2図 三俣城縄張り図	3
第3図 三俣城北東曲輪跡周辺地形図	4
第4図 グリッド配置図	5
第5図 遺構分布図	6
第6図 基本土層図	7
第7図 土塁断面図	9
第8図 遺物実測図 (土師器) 1	14
第9図 遺物実測図 (土師器・磁器) 2	15
第10図 遺物実測図 (縄文土器) 3	16

表 目 次

第1表	遺物観察表1	12
第2表	遺物観察表2	13

図 版 目 次

口 絵	三俣城北東曲輪跡遠景	
図版1	調査区全景・土塁および硬化面	17
図版2	調査区全景・調査区周辺遠景	18
図版3	土塁（西から・南から）	19
図版4	土塁断面1・2	20
図版5	調査区東側土層断面・発掘作業風景	21
図版6	遺物写真1	22
図版7	遺物写真2	23
図版8	遺物写真3	24
図版9	遺物写真4	25
図版10	遺物写真5	26
図版11	遺物写真6	27



三俣城北東曲輪跡遠景

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

三俣城北東曲輪跡は、宮崎県南西部、都城盆地の東端に近い北諸県郡山之口町大字花木の丘陵上に位置する遺跡である。南隣の丘陵には平成4年に山之口町教育委員会が調査主体となり、宮崎県文化課によって発掘調査が行われた三俣城の中心部分がある。

今回、農林水産省九州農政局が都城盆地農業水利事業に伴い当地に前方ファームポンドを建設することとなり、遺跡の有無の照会が県文化課にあった。県文化課では、試掘調査を行った結果、城郭の土塁と考えられる高まりと数点の素焼きの土器片を発掘したことから遺跡と判断し本調査を行うこととなった。

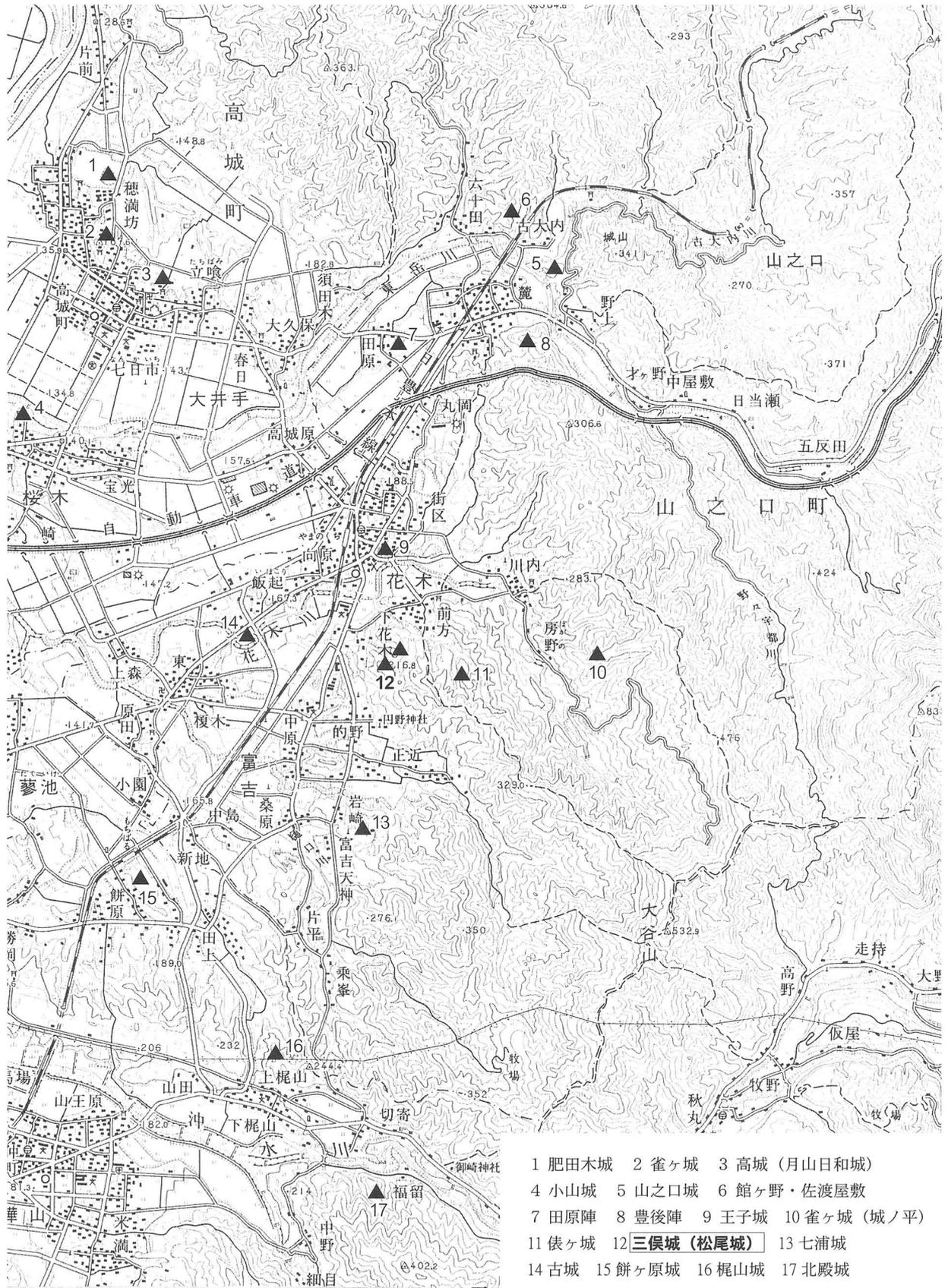
現地での調査は平成15年9月16日から平成15年10月31日までの間行い、出土した遺物と図面の整理作業は、平成16年6月から7月まで県埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

三俣城北東曲輪跡の発掘調査・整理作業・報告書作成については次の体制で実施した。

宮崎県埋蔵文化財センター

	平成15年度 (発掘調査)	平成16年度 (整理作業・報告書作成)
所 長	米良 弘康	宮園 淳一
副 所 長 兼 総 務 課 長	大園 和博	同 左
副 所 長 兼 調 査 第 二 課 長	岩永 哲夫	同 左
総 務 課 主 幹 兼 総 務 係 長	石川 恵史	同 左
調 査 第 二 課 調 査 第 四 係 長 (調 整)	近藤 協	同 左
調 査 第 二 課 調 査 第 四 係 主 査 (調 査 ・ 報 告 書 担 当)	柳田 宏一	同 左
同 上 (調 査 担 当)	玉利 勇二	



第1図 三俣城北東曲輪跡周辺位置図 (S = 1 : 50,000)

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 位置と環境

三俣城北東曲輪跡のある北諸県郡山之口町は宮崎県南西部に位置する人口7,300人あまり、面積約97.5平方kmの町で、都城盆地の北東部にあり、北側に高岡町、北西から南西にかけて高城町、南側に三股町、東側に田野町と境を接する。西側から南側にかけては平地が開けているが、北側から東側にかけては鰐塚山系が迫っている。山と山の間を中小の河川が東から西に流れ、町中央部はこれらの河川の作った扇状地の上に広がっている。三俣城跡は山地と平地の境目に近い丘陵上に所在する。

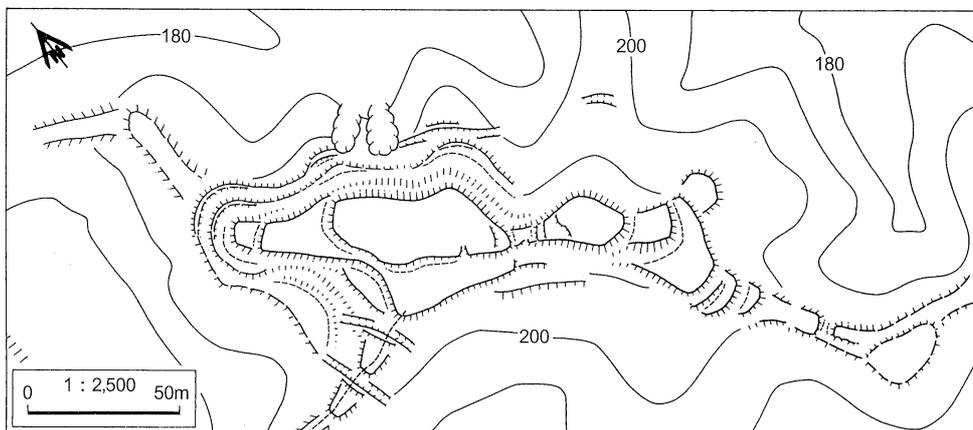
山之口は古くから交通の要衝となっており、三俣城跡は都城盆地を一望できる丘陵上にある。盆地内での社会の動勢を監視するのに適した場所であったと考えられる。

町内は発掘の調査事例は少ないが、遺跡からは縄文時代の遺物が出土しており、弥生時代の遺跡も町内に点在している。古代からは文献にその存在が見られ、室町時代には都城盆地一帯が伊東氏と島津氏の攻防の場となった。三俣城もその時期に築城された城である。

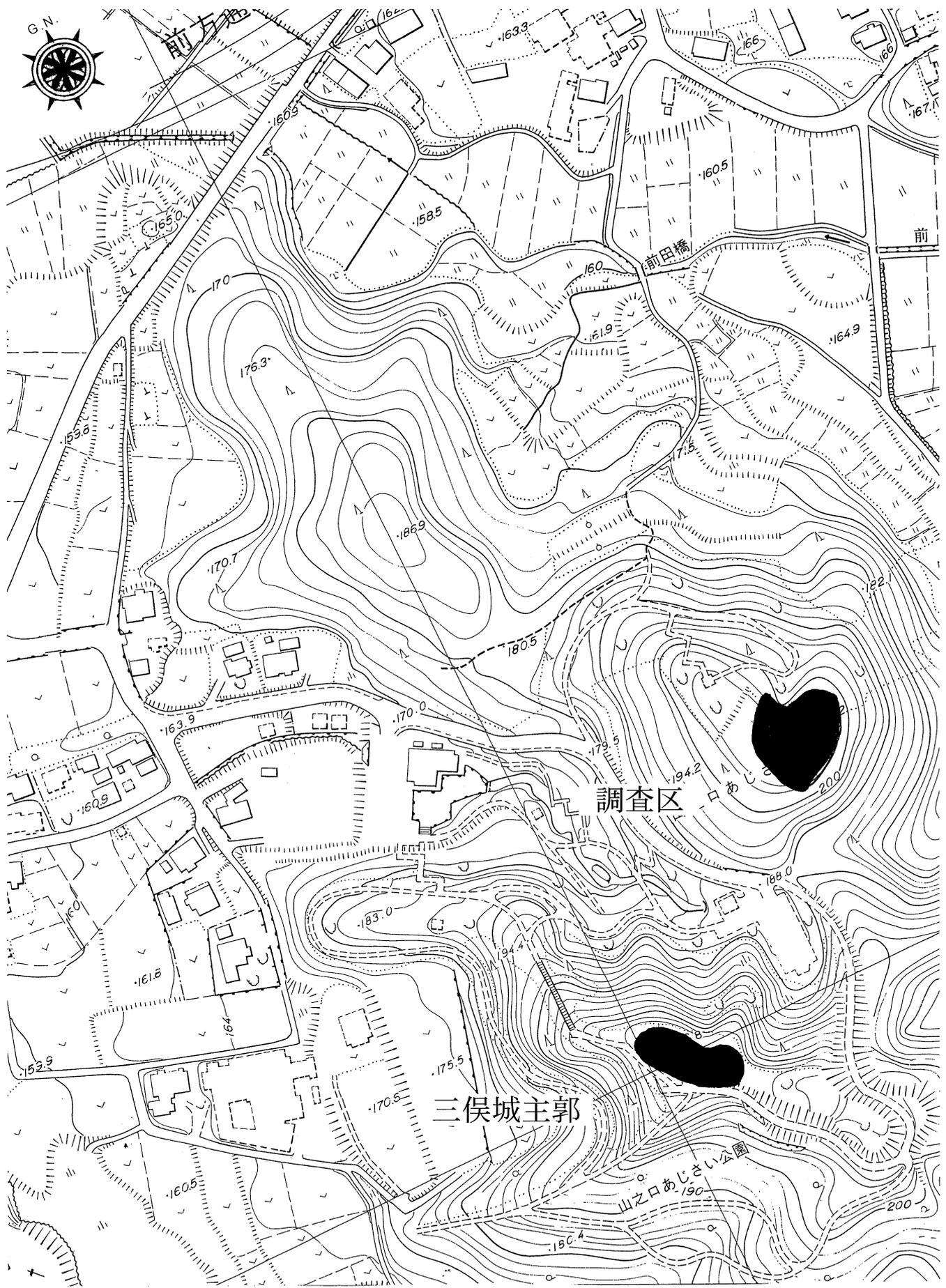
三俣城は、『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』（1993 宮崎県教育委員会）によると『標高217mの山頂部の曲輪を中心に、4つの主要な曲輪が直線状に並ぶ。最高所の主郭と見られる曲輪と、その南東隣の曲輪との間には土橋状の狭隘部が見られる。北側の斜面には狭小な帯曲輪が巡っている。北側および南側の尾根には段状の小さな曲輪が築かれている。また四方にのびる尾根には要所に堀切を設け、進入路を絶っている。』

当城は南北朝期に肝付兼重が築いたとされ、延文年間頃には畠山民部大輔が、明徳年間頃には和田氏、高木氏が居城したらしい。その後、伊東氏と島津氏による攻防戦を経て天文3（1534）年には北郷忠相の領有するところとなった。

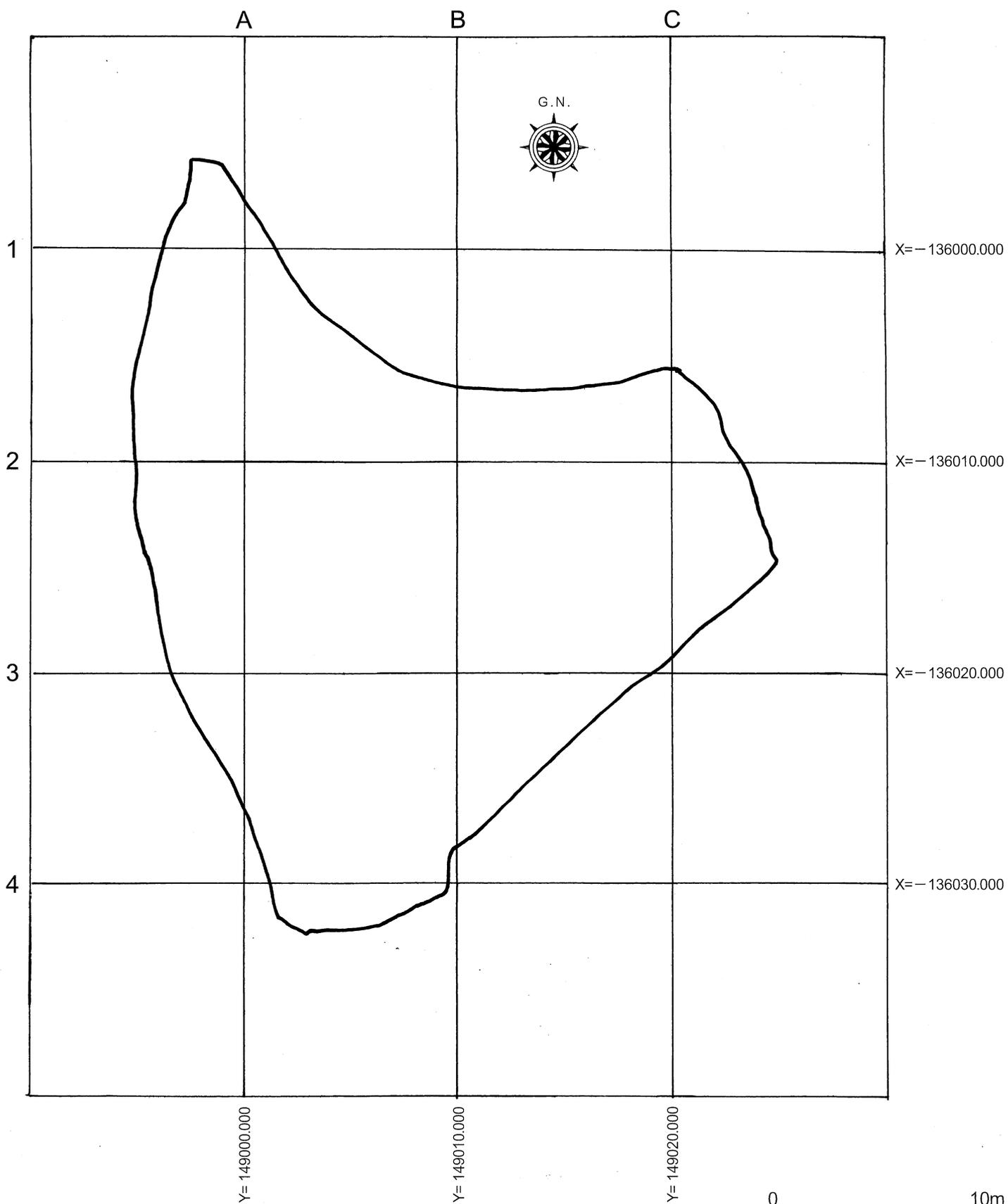
公園化に伴い発掘調査が実施され、掘立柱建物や鍛冶工房跡と目される火処、土坑等の遺構が検出され、土師器、陶磁器類など多くの遺物も出土している。なお、それらの遺構の一部は公園化により破壊されている。』と記載されている。なお、文中にある発掘調査は山之口町教育委員会によって平成4年度に実施された。



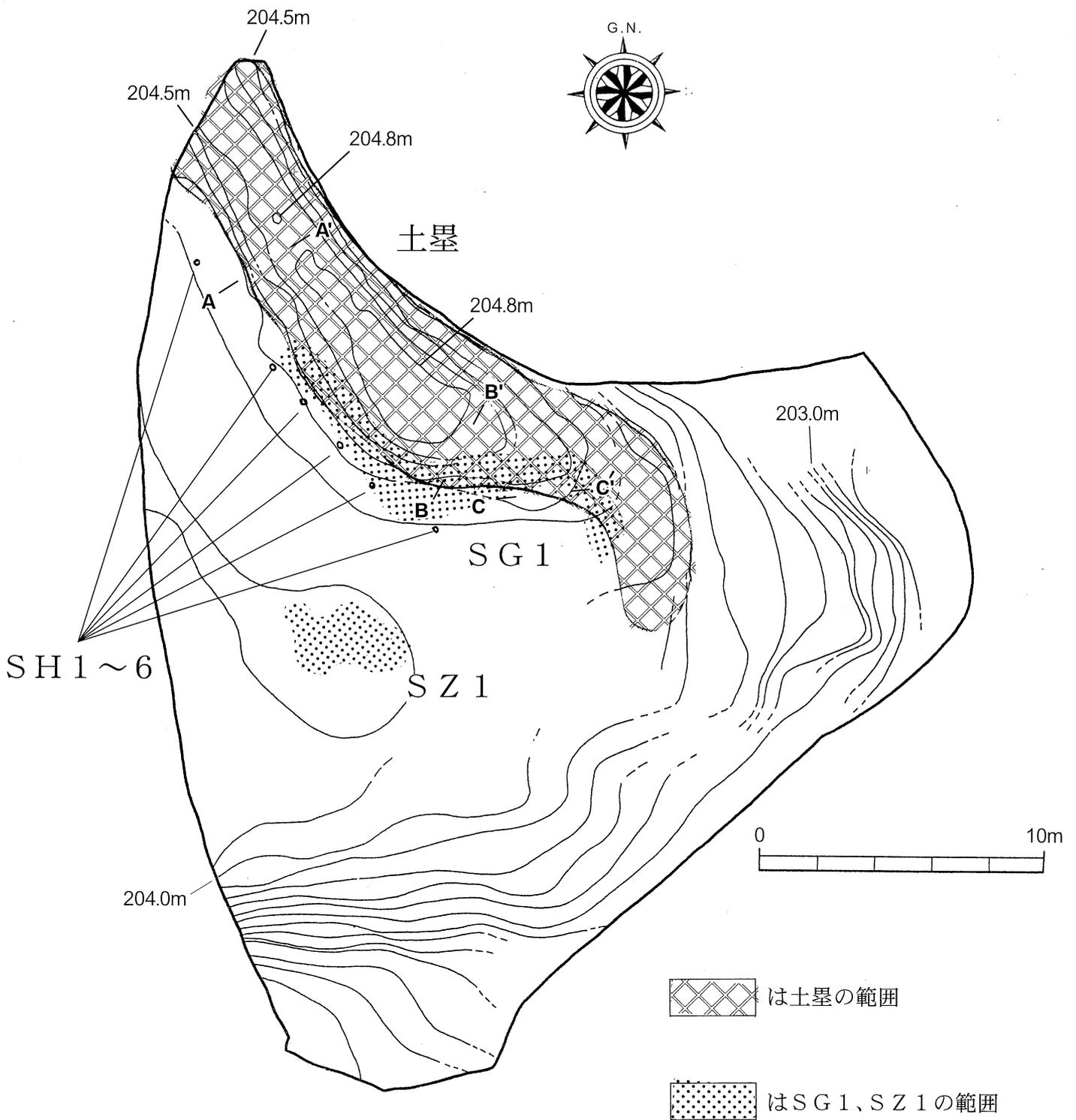
第2図 三俣城縄張り図（千田嘉博原図作成 山之口町教育委員会提供）
『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』（1993 宮崎県教育委員会）より転載



第3図 三俣城北東曲輪跡周辺地形図 (S = 1 : 1,000)



第4図 グリッド配置図 (S = 1 : 250)



第5図 遺構分布図 (S = 1 : 200)

第2節 調査の概要

本遺跡は中世山城、三俣城の北側に位置する独立丘陵の頂上部にあり、三俣城の一部、または三俣城の北側を監視する見張り台があったのではないかと推察されていた。

今回の調査区は三俣城本体とは独立した北側の丘陵上にあり、標高は三俣城（標高217m）よりやや低く、もっとも高い部分で205.6m、平場は204m前後である。南側、北側、東側の三方が急な傾斜地となっており西側は平坦地が続いている。

試掘調査の段階では土塁と思われる遺構と遺物が確認された。調査前の状態は杉林で、調査に入る前に伐採されていたが、枝や輪切りの丸太等がかなり残っており、これらの除去から行った。その後、重機で第Ⅰ層を剥いでいったが、太い切り株の抜根は遺構を痛める可能性があるため残した。重機での作業が終了してから人力でⅡ層以下の遺構検出を行った。

第Ⅱ層上面では土塁に沿って道の跡かと思われる硬化面（SG1）と調査区東側に遺物と焼土を伴う硬化面（SZ1）が検出された。また、道状の硬化面に沿ってピット（SH1～6）が検出された。第Ⅱ層上面の検出・実測作業を終えた後、第Ⅱ層の掘り下げを行った。第Ⅱ層埋土中からSZ1に集中して土師器片が出土したが、他の場所からはほとんど遺物が検出されなかった。遺構も同様であった。

調査区西側では第Ⅲ層の下に第Ⅳ層は検出されず、第Ⅴ層もしくは第Ⅵ層の地山の岩盤となるため、全体的な掘り下げは第Ⅲ層まで実施した。丘陵の斜面に近い東側は第Ⅲ層の下に黒色土が層を成しており、調査区東側はこの黒色土上面まで掘り下げた。黒色土の中からは縄文土器が数点出土した。

第3節 遺跡の層序

第Ⅰ層 表土
第Ⅱ層 黒色土と御池降下 軽石の混ざった層 (遺物包含層)
第Ⅲ層 第Ⅱ層と同じ土質 だが第Ⅱ層より硬い (遺物包含層)
第Ⅳ層 御池降下軽石層 (御池ボラ層)
第Ⅴ層 黒色土
第Ⅵ層 灰白色の礫と砂の層
第Ⅶ層 灰白色の岩盤

本遺跡の基本土層は、第6図に示すとおりである。

第Ⅰ層は表土で、黒色土と砂が混ざった層である。

第Ⅱ層と第Ⅲ層は遺物の包含層であるが第Ⅱ層は削平をかなり受けており、出土遺物も二次的なものが多い。

第Ⅲ層が出土遺物の中心となる層で土師器の皿が多く出土した。

第Ⅳ層は御池降下軽石層で約40～60cmの厚さがある。第Ⅴ層は部分的にしか認められず、調査区東側の丘陵の斜面に近い方では厚さ80cm近くあったが調査区西側ではほとんどこの層は検出できなかった。

第Ⅵ層は第Ⅶ層が風化したものと思われ、下の方ほど礫の大きさが大きくなっている。

第6図 基本土層図（調査区西壁）

第4節 遺構と遺物

遺構・遺物は第Ⅲ層で検出されたが、他の層では調査区東側で第Ⅳ層の黒色土中から縄文土器が数点見つかっただけであった。そこでここでは第Ⅲ層に含まれる遺物を中心に記述する。

1 遺構

(1) 土塁

調査区は丘陵頂上部分を平地に造成したと思われるが、その平地の東端から南側にかけては急な斜面となり谷を形成している。その谷を臨む部分に沿って北西から南東にかけて帯状の高まりがみられた。これが自然の地形か人工的なものか判断するために長軸方向に直角に2カ所、トレンチを入れた。断面は御池ボラの自然堆積層であり、土を積み重ねて作った土塁ではないことが分かった。しかし、高まりの内側（西側）は御池ボラがかなり削平されて80cm近く低くなっており、山の斜面を削りだして土塁と平場を造成したものと考えられた。

土塁は地形に沿って弓状に湾曲している。平場との比高差は北西部は高く南東部ほど低くなっており、南東部の平場の突き出し部分で消滅している。調査区の境界から消滅部分までの全長は約24m、最も高い部分で205.6mを測り、平場との比高差は1.2mある。

(2) 道状遺構（SG1）

調査区北側で土塁の内側（西側）に沿って硬化面が確認された（第5図）。幅は80cmほどで、調査区の外側から続いている。北西から南東に4mほど延びたあと、東に3mほど続き、そこでほぼ直角に南に曲がり消滅している。調査区内で確認できた全長は約9mである。断面を確かめるためにトレンチを2カ所設定したが、いずれも周辺の土層と同質であり、整地したような痕は見られないことから、通路として利用していた箇所が踏み固められてできた硬化面だと思われる。

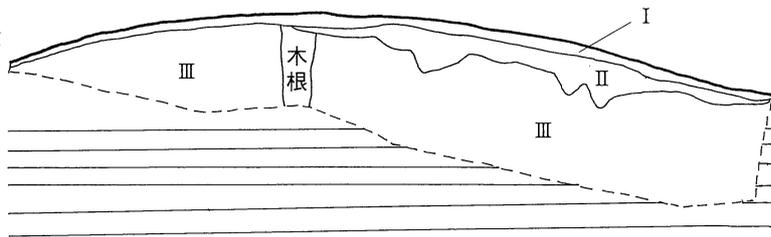
(3) 焼土と遺物を伴う硬化面（SZ1）

調査区西側の一番低くなった平場に硬化面が検出された（第5図）。硬化面のほぼ中央には焼土が認められ、その周辺からは土器片が多数出土した。今回の調査で最も遺物の集中した部分である。遺物はすべて土師器の細片であった。住居跡の可能性も考えられるが、建物跡に伴うピット等は検出されなかった。

(4) ピット（SH1～6）

調査区北側の道状遺構に沿うようにピットが検出された（第5図）。検出された6個のピットの内、一番南側の1個を除いてほぼ北西から南東にかけて直線上に並んでいる。間隔は一定ではなく約1.5mから2mの間である。中世山城という遺跡の性格から考えて柵列の可能性も考えられる。

A



A

LH=204.900m

I 褐色土 (7.5YR3/1) で直径 1~5 mm 前後の黄褐色粒を少量含む。しまりがあり、粘性も少しある。

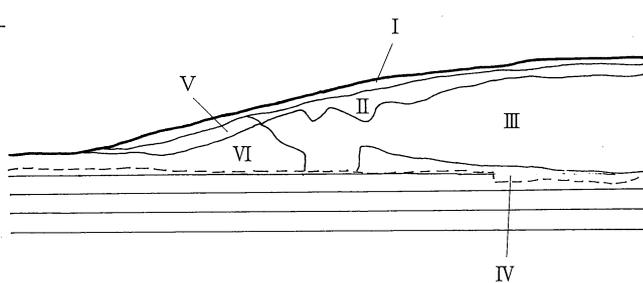
II 暗褐色土 (7.5YR3/4) で直径 1~10mm の黄橙粒子を多量に含む。しまり及び粘性が強い。

III 黄橙色 (10YR6/8) の御池降下軽石層であり直径 1~10 mm 黄褐色粒子のみで構成。しまりがややある。

IV 暗褐色土 (10YR4/6) で一部は粘土化している。ところどころに黄橙粒子を微量含む。

V 暗褐色土 (7.5YR3/4) で直径 1~3 mm 前後の黄橙色粒子を微量含む。暗褐色土 (10YR3/3) で直径 1~2 mm の黄橙色粒子を少量含む。しまりがあり、粘性もある。

B

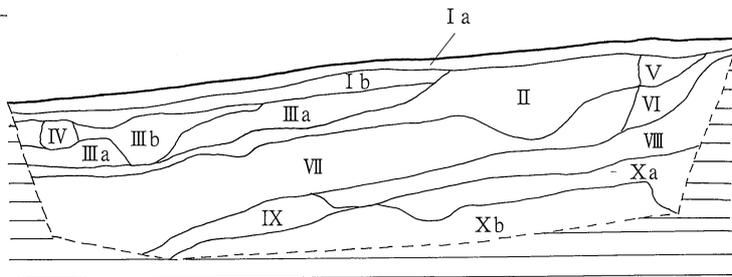


B'

LH=204.700m

C

LH=204.200m



I a 暗褐色土 (7.5YR3/4) と黒褐色土 (10YR2/2) が混じり斑状を呈する直径 1~10mm の黄橙色粒子を多量に含む。しまりがあり、粘性がやや強い。

I b 暗褐色土 (7.5YR3/4) と黒褐色土 (10YR2/2) が混じり斑状を呈する。直径 1~10mm の黄橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともにやや強い。

II 暗褐色土 (7.5YR3/3) で直径 5~10mm の黄褐色粒子を多量に含む。しまりがあり、粘性がやや強い。

III a にぶい黄橙 (10YR5/4) で 1~5 mm の黄褐色粒子を多量に含む。しまりがあり、粘性がやや強い。

III b にぶい黄橙 (10YR5/4) で 1~5 mm の黄褐色粒子を少量含む。しまりがあり、粘性が強い。

IV 黒褐色土 (10YR2/2) で直径 1~3 mm 前後の黄褐色粒子を少量含む。しまり、粘性がややある。

IV 黒褐色土 (7.5YR3/2) で直径 1 mm 前後の黄褐色粒子を微量含む。しまり、粘性ともやや強い。

V 暗褐色土 (7.5YR3/3) で直径 1~10mm の黄褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともややある。

VI 黒色土 (7.5YR2/1) で直径 1~10mm の黄褐色粒子を少量含む。しまり、粘性がやや強い。

VII 黄褐色土 (10YR6/8) の御池降下軽石層である。直径 1~10mm の黄褐色粒子のみで構成。しまり、粘性がややある。

VIII 暗褐色土 (10YR4/6) で直径 1~5 mm の黄褐色粒子を少量含む。しまり、粘性が強い。

IX a 褐色土 (10YR4/6) で直径 1~5 mm の黄褐色粒子を少量含む。しまり、粘性が強い。

IX b 褐色土 (10YR4/6) で一部粘土化しており、ところどころ灰褐色のブロックを多量に含む。ややしまりがあり、粘性はない。

第7図 土壘断面図1 (S=1:20)

2 遺物

今回の調査で出土したのは土器片のみで石器や鉄製品等は検出されなかった。

出土した土器片のほとんどは土師器で三俣城が文献に現れる時期に一致したものが多い。青磁片が一点出土したが、これも16世紀頃のものであった。他に土塁の外側の黒色土の中から縄文土器が数点出土したが、黒色土の層が極めて限られた場所にしか認められず、この時代を語るだけの資料は検出できなかった。

遺物は土師器、陶磁器、縄文土器の3種類に分けられる。

(1) 土師器 (第8図・第9図)

出土遺物のほとんどは中世の土師器であり(35点中26点)、大部分は数cm四方の細片であった。遺物包含層の直上まで削平されていることなどから、調査区に埋もれていた遺物の多くが失われていると思われる。土師器は器形、法量によってさらに細かく分類できる。

器形による分類

- A 坏 1~14,17,18
- B 小皿 19~26
- C 高台付埴 15,16

今回取り上げた土師器はほとんどが坏と小皿であった。ピックアップした土師器26点中16点が坏、小皿が8点、高台付埴2点で他の器種は確認できなかった。かなり偏った出土状況だが、今回の遺跡が山城という通常の住居跡等とは異なる環境であることから考えて、このような器種の出土状況になるものと考えられる。

坏及び小皿は底部や立ち上がりの状態によってさらに細分できる。

坏 (第8図)

16点中底部の確認できる14点全ての底部に糸切りによる切り離し痕が認められる。作りは全体的に粗雑で器形の崩れたものや器内面の調整が荒く凹凸が目立つものが見られる。その中で全体的な特徴から見て以下のように分類できる。

I類

- ア 底部から口縁にかけての立ち上がりが直線的なもの。 8点 (1,2,4,5,6,7,8,18)
- イ 底部から口縁にかけての立ち上がりが口縁部付近で外反しているもの。 1点 (9)

II類 底部に円盤状の高台が見られるもの。 4点 (11,12,13,14)

III類 底部が不明なもの。 2点 (17,18)

I類について個別に観察すると

1, 2, 5は底部から直線的に立ち上がる。3点とも底部中央は端に比べて断面の厚さが薄い。

4, 6, 7, 18は底部からの立ち上がりは直線的であるが、底部中央の断面の厚さは端部とほぼ同じ厚さを有している。

8は底部中央部分の断面が厚くなっている。

9は底部断面は端部と中央部はほぼ同じ厚さであるが、口縁部がやや外反している。

Ⅱ類では10,11については口縁部が欠損しているため残った部分からの推測になるが立ち上がりは直線的である。底部断面はいずれも内面の凹凸が激しく10では中央部が薄く、11では端と中央の間が厚くなっている。

12は立ち上がりは直線的、13は立ち上がりの途中に僅かなくびれがみられ、底部断面は中央部が薄く調整されている。14は立ち上がりは直線的、底部断面は端部から中央部にかけてほぼ同じ厚さである。円盤状高台ははっきり確認できる。

Ⅲ類は、17,18ともに口縁部から胴部の細片である。ともに口縁部は内向して立ち上がっている。

小皿（第9図）

坏と同じく全体的に調整は粗い。底部が反っていたり、口縁部の湾曲が目立つ。底部は坏と同じく全ての底部に糸切りによる切り離し痕が認められる。

I類 底部に高台が見られないもの。 6点（19,20,21,22,23,26）

Ⅱ類 円盤状の高台が見られるもの。 2点（24,25）

I類は口縁部の欠損している23を除いて全て直線的に立ち上がっている。底部断面は端部と中央部の厚さはほぼ同じであるが、21は中央部内面が凹み、かなり薄くなっている。

Ⅱ類の24は直線的な立ち上がり、25は内傾しながらの立ち上がりである。26は口径と器高との比が他の遺物に比べて小さい。

高台付碗（第8図）

15は、ほとんど底部だけであるが、浅い高台が確認できる。底部断面は内面に多少の凹凸は見られるがほぼ端部と中央部の厚さが一定である。16は今回出土遺物の中では最大の個体であるが、内外面の調整は丁寧になされている。やや内向しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。高台は欠損しているが貼り付け痕が残っている。

（2）青磁・白磁（第9図）

青磁片1点（27）と白磁片1点（28）が出土した。

青磁片の器種は碗であり、遺物集中部分の硬化面付近から出土した。口縁から胴部にかけての部位でかなり大きな破片であり、割れ口の断面も新しかったので、他にも断片があると思われたが検出されなかった。28は白磁の皿で口縁部から底部の細片である。底部以外は全体に釉薬がかかっている。口縁部がわずかに外反する。

（3）縄文土器（第10図）

土壘の外側の斜面部分を掘り下げたところ黒色土層中から土器が2点出土した（33,34）。またG4からは外面に貝殻条痕の見られる胴部片と底部片が2点出土した（32,35）。

31は口縁部の一部で大きく外反し、口唇部が立ち上がっている。立ち上がり部分の外面には一条の沈線が水平に入っている。内面・外面とも磨きがかかっており堅い質感である。32は3cm四方ほどの胴部片であり、傾き等は不明である。外面に貝殻条痕があるが、かなり摩耗している。35は底部から胴部にかけての破片である。底部は僅かに丸みを帯びている。

土壘付近からも口縁部（34）と胴部（33）が1点ずつ出土した。34は口縁端部と胴上部屈曲部に刻目突帯が貼り付けてある。口縁部が内傾しており器形は深鉢と思われる。

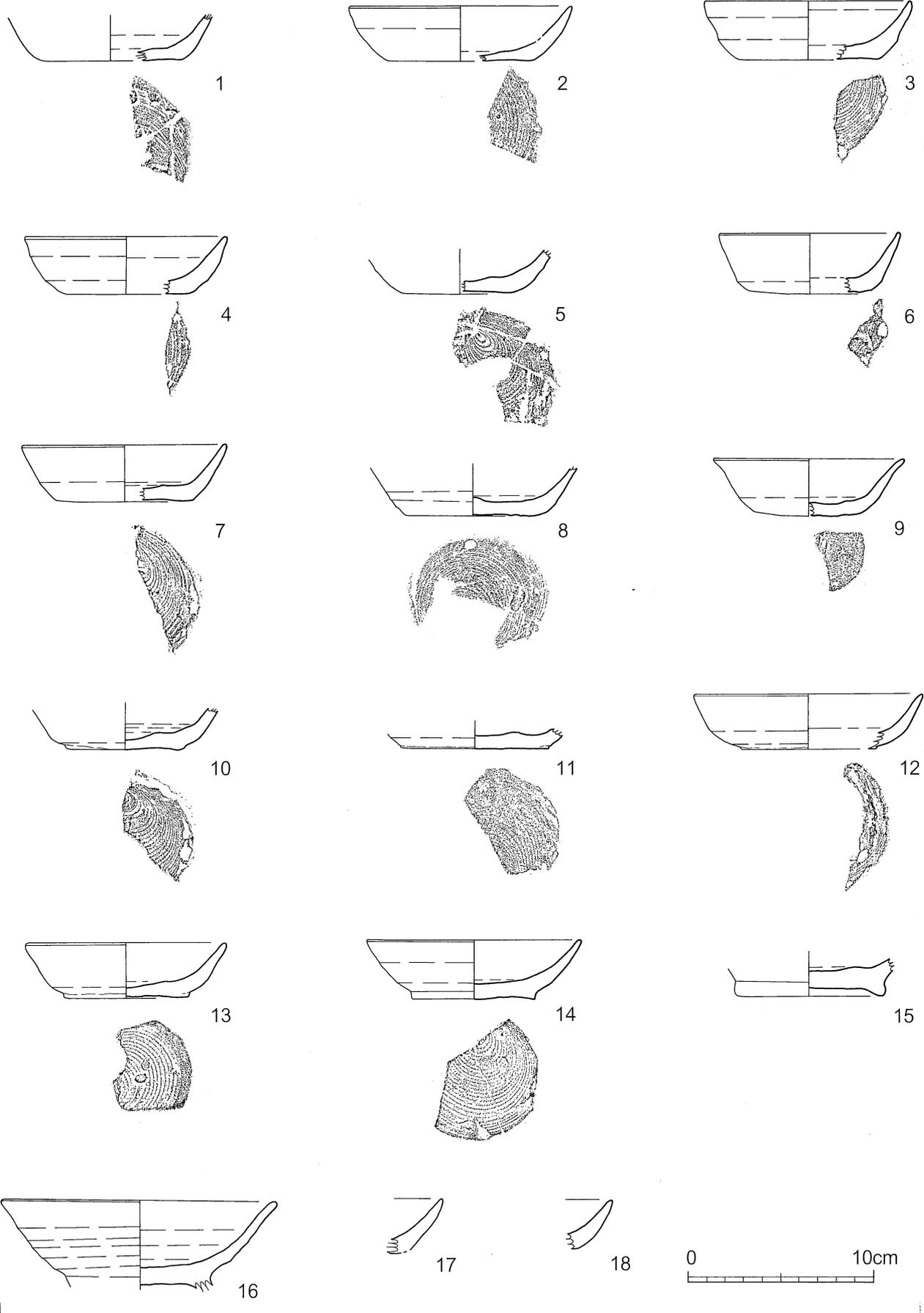
いずれも縄文時代晩期の土器かと思われる。

第1表 遺物観察表1

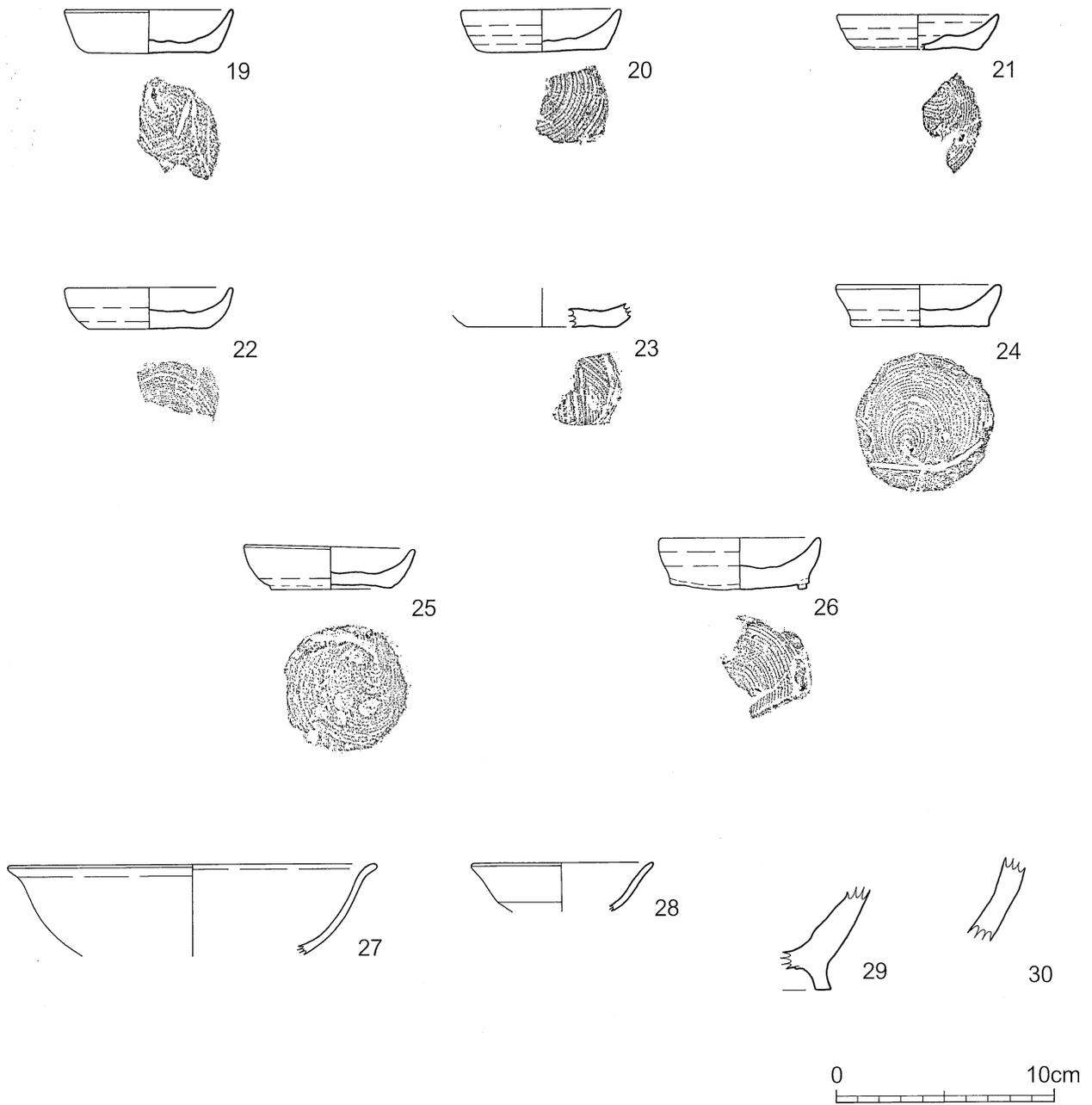
遺物番号	種別	出土層及び位置	器種	部位	法量(cm)			胎土の特徴	文様・調整		色調		焼成	備考
					口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面		
1	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	12.2	7.2		2mm以下の橙色粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	反転 復元
2	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	11.9	7.8		3mm以下の橙色粒、1mm以下の黒色粒、微細な光沢粒を含む	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、スス付着	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	
3	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部				1mm以下の橙・黒色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、スス付着、糸切り底	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	
4	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	11	7.5		1mm以下の橙・黒色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、ケズリの後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)、 にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	反転 復元
5	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	10.8	6.5		1mm以下の橙・黒色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)、 褐(7.5YR4/6)	良好	反転 復元
6	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	9.7	6.5		1.5mm以下の黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、ケズリの後ナデ、糸切り底	にぶい黄橙 (10YR6/4)、 にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	反転 復元
7	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部				2mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢流を含む	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	良好	
8	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	7.3	5.8		2mm以下の橙色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	反転 復元
9	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	7.3	6.4		1.5mm以下の橙色粒、1mm以下の黒色粒、微細な光沢粒を含む	指ナデ、回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	反転 復元
10	土師器	Ⅲ層	皿	口縁～ 底部	10.7	6.7		2mm以下の橙色粒、1mm以下の白・黒色粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、やや風化気味	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	反転 復元
11	土師器	Ⅲ層	皿	胴部～ 底部		7.7		6mm以下の橙色粒、1mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	指頭痕、指ナデ、 回転ナデ	ナデ、風化気味	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	反転 復元
12	土師器	Ⅲ層	皿	胴部～ 底部		6.1		2mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢流を含む、黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ、ハケメの後ナデ	回転ナデ、風化気味、糸切り底	にぶい黄橙 (10YR7/4, 6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)、 にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	反転 復元
13	土師器	Ⅲ層	皿	胴部～ 底部		6.8		1mm以下の黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい黄 (2.5Y6/3)	黒褐(2.5Y3/1)、 にぶい黄 (2.5Y6/3)	良好	反転 復元
14	土師器	Ⅲ層	皿	胴部～ 底部		8			ナデ	ナデ、糸切り底、粘土の返り	にぶい黄 (10YR6/4)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	良好	反転 復元
15	土師器	Ⅲ層	皿	胴部～ 底部		7		微細な橙色粒、光沢粒を含む	ナデ、回転ナデ ハケメのような 工具痕	ケズリの後ナデ、 糸切りの後 板状圧痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	反転 復元
16	土師器	Ⅲ層一括	皿	口縁～ 底部	7.3	5.9		2mm以下の橙色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底、 粘土の返り	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	反転 復元
17	土師器	土壘	皿	口縁～ 底部	11.6	6.7		1.5mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	反転 復元
18	土師器	土壘	皿	口縁～ 底部	10.9	7.4		1.5mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)、 にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)、 にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	反転 復元

第2表 遺物観察表2

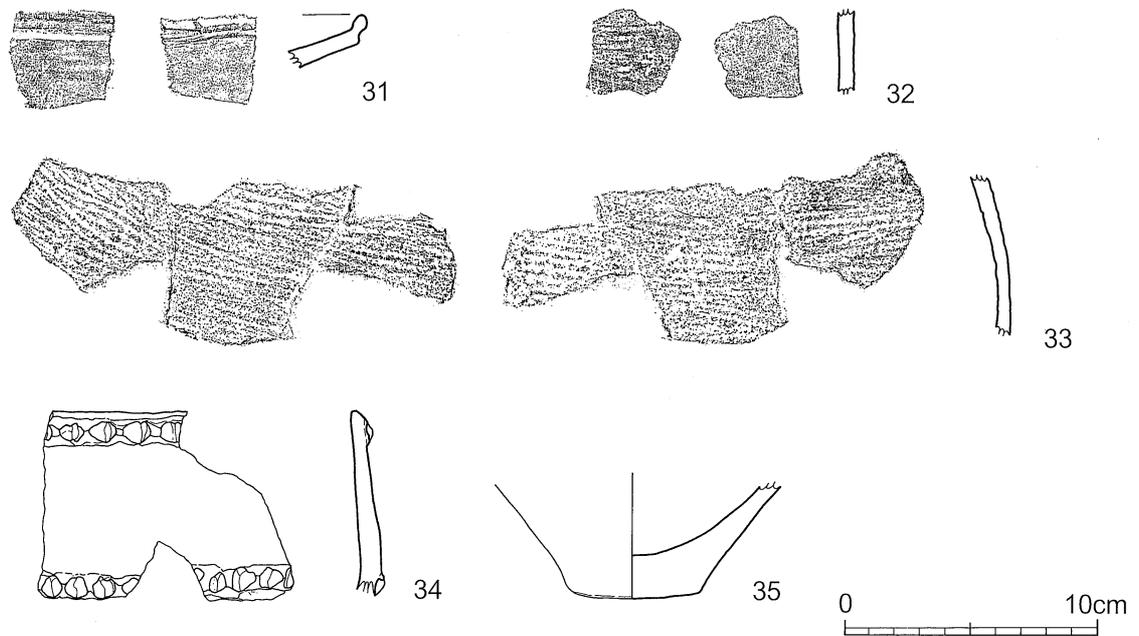
遺物番号	種別	出土層及び位置	器種	部位	法量(cm)			胎土の特徴	文様・調整		色調		焼成	備考
					口径	底径	器高		内面	外面	内面	外面		
19	土師器	土壘	皿	口縁～ 底部	7.7	5.4		1.5mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ、指頭痕	回転ナデ(風化気味)、一部黒変	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	反転復元
20	土師器	土壘	皿	胴部～ 底部		6.4		1.5mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)、 橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)、 橙(5YR7/6)	良好	反転復元
21	土師器	トレンチ2	皿	口縁～ 底部	7.7	5.6		1mm以下の橙・黒色粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底、粘土の返り	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	
22	土師器	トレンチ4、表償	碗	口縁～ 底部	14.7			5mm以下の橙色粒、2mm以下の灰色粒、1.5mm以下の黒色光沢粒、微細な乳白色の粒、透明光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、一部黒変	にぶい黄橙(10YR7/4)、 灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)、 灰黄褐(10YR5/2)	良好	
23	土師器	トレンチ4、表償	皿	完形	7.8	5.5		2mm以下の赤褐色粒、1mm以下の黒・乳白色粒、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	
24	土師器	トレンチ5	皿	口縁～ 底部	10.2	5.8		2mm以下の橙色・黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ、工具痕	浅黄橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)、 浅黄橙(10YR8/4)	良好	反転復元
25	土師器	トレンチ6	皿	口縁～ 底部		8.1		2mm以下の橙色・黒色灰白色の粒、1mm以下の光沢粒を含む	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6、 7/6)	良好	反転復元
26	土師器	ミマタ	皿	口縁～ 底部	7.3	6.2		2mm以下の黒色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	回転ナデ	回転ナデ、糸切り底	にぶい黄橙(10YR7/4)、 褐(10YR4/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	
27	土師器	トレンチ6	皿	胴部～ 底部				2mm以下の褐色粒、1mm以下の透明粒を含む	ヨコナデ	荒いナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	堅緻	
28	陶器	Ⅲ層	不明	胴部				2.5mm以下の灰色粒、2mm以下の白・黒色粒を含む	ヨコナデ	ナデ、斜方向のハケメ痕	灰オリーブ(7.5Y4/2)	灰オリーブ(7.5Y4/2)	堅緻	
29	青磁	Ⅲ層	碗	口縁～ 胴部	16.8			精良	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	オリーブ灰(5GY6/1)	オリーブ灰(5GY6/1)	堅緻	反転復元
30	白磁	Ⅲ層	皿	口縁～ 胴部	8.2			精良	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	灰白(5Y8/1)	灰白(5Y8/1)	堅緻	反転復元
31	縄文土器	トレンチ	浅鉢	口縁部				2mm以下の白色の粒を含む、1mm以下の黒色光沢粒を含む、微細な光沢粒を含む	ミガキ	ミガキ、スス付着	にぶい黄褐(10YR5/3)	暗灰黄(2.5YR5/2)、 浅黄(2.5Y7/3)	良好	
32	縄文土器	トレンチ4	皿	胴部				微細な光沢粒を含む	ナデ	貝殻条痕	黒褐(5YR2)	にぶい赤褐(5YR4/3)、 黒褐(5YR2/2)	良好	
33	縄文土器	土壘	深鉢	胴部				2mm以下の黒色、橙色の粒を含む、1.5mm以下の黒色光沢粒を含む	一部黒変	貝殻条痕、スス付着	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)、 褐灰(10YR4/1)	良好	
34	縄文土器	土壘	壺	口縁～ 胴部				2mm以下の赤褐色粒、1mm以下の透明・黒色光沢粒を含む	ナデ	刻目貼付突帯、ナデ、スス付着	にぶい黄橙(10YR6/3)	橙(7.5YR6/6)	良好	
35	縄文土器	トレンチ4	壺	胴部～ 底部			4.9	2mm以下の黒色、白色、灰色の粒、2mm以下の透明・黒色光沢粒を含む	丁寧なナデ	縦・横方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	橙(7.5YR6/6)	良好	



第8図 遺物実測図1 (土師器・磁器 S=1:3)



第9図 遺物実測図2 (土師器・磁器 S=1:3)



第10図 遺物実測図3（縄文土器 S=1:3）

第5節 まとめ

三俣城主体に隣接する北東独立丘陵上に位置する本遺跡は、北面の脅威に対処するための重要な山城構成施設（曲輪）の一つであったと考えられる。しかし、調査は北に張り出した平坦面の一部に留まったため、全体的な様相を確認することはできなかった。

しかし、今回の調査で下記の事項を確認できたことから本調査区は中世山城の曲輪構成施設の一角であったことが分かった。

- (1) 土塁が存在すること
- (2) 道状遺構や何かの遺構と思われる硬化面が検出され、そこから中世の土師器が出土したこと。
- (3) 調査区南側と調査区外になるが西側に山を整形して方形の平場を造成しており、曲輪の一部と思われること。
- (4) 出土した遺物が三俣城本体と時期的に一致すること。
- (5) 地形的に一般の生活のための場所となり得ないこと。

三俣城本体の曲輪からは都城盆地一帯が一望できるが、北側は本調査区の所在する丘陵が視界を遮り見通せない。そのため本調査区の位置に見張り台的な位置づけの曲輪を設けて本城北側の守りを補完したのではないだろうか。

曲輪としては頂上部の本調査区しか平場がないことから規模としてはかなり小さく、南隣の三俣城主体の曲輪の一部として築かれたのではないかとと思われる。

このようなことから、本調査区は山城の一施設としての可能性が大きい。

参考・引用文献

宮崎県教育委員会 1993『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』

圖 版



調査区全景（東側より）



土壘および硬化面（真上より）



調査区全景（真上より）



調査区周辺遠景



土塁（西よりから）



土塁（南側から）



土墨断面 1



土墨断面 2



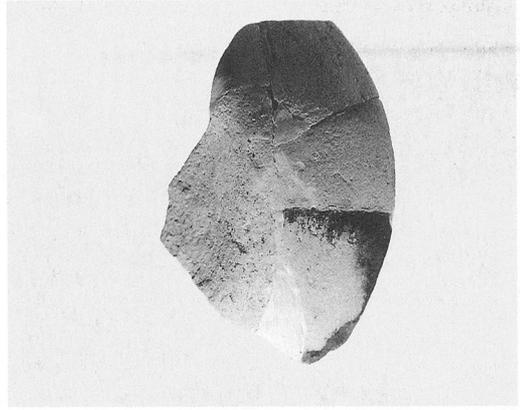
調査区東側土層断面



発掘作業風景



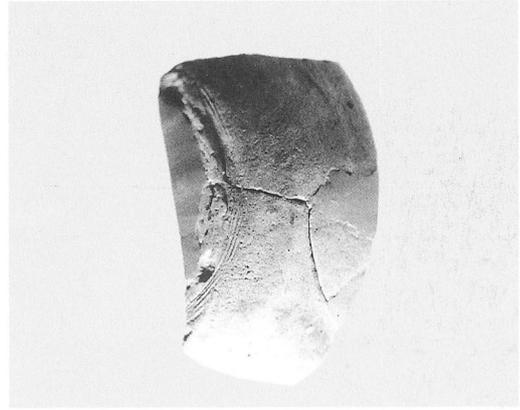
1



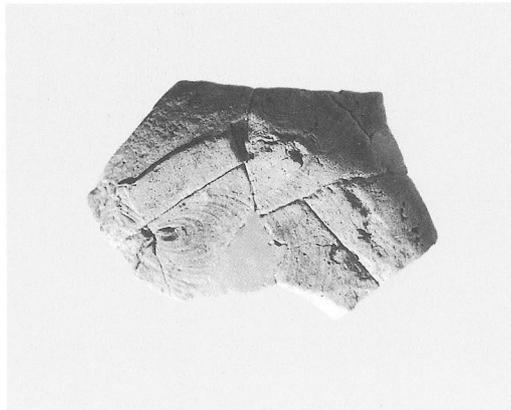
2



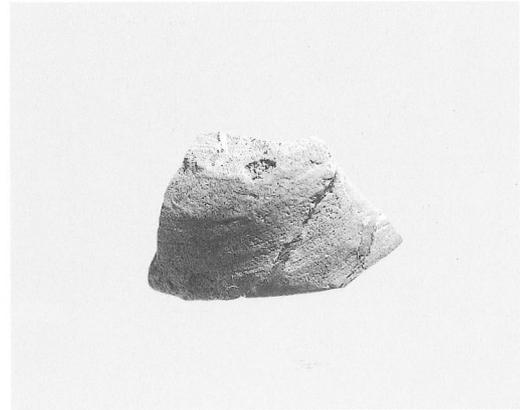
3



4

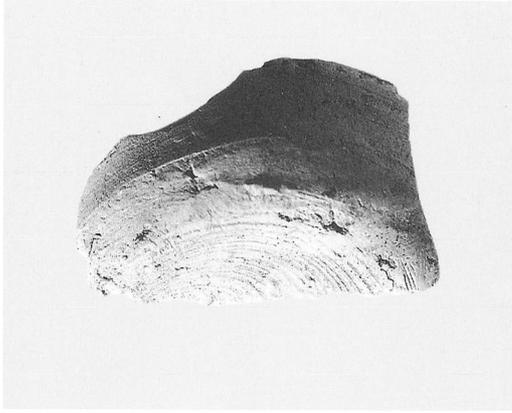


5

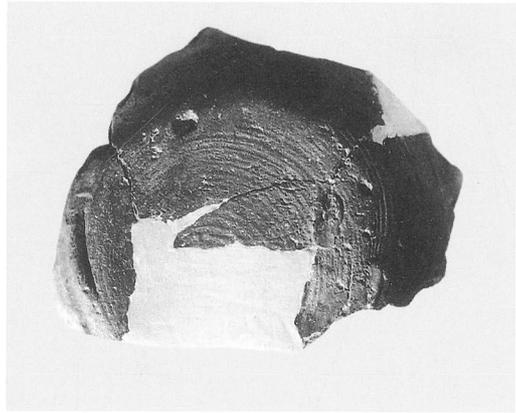


6

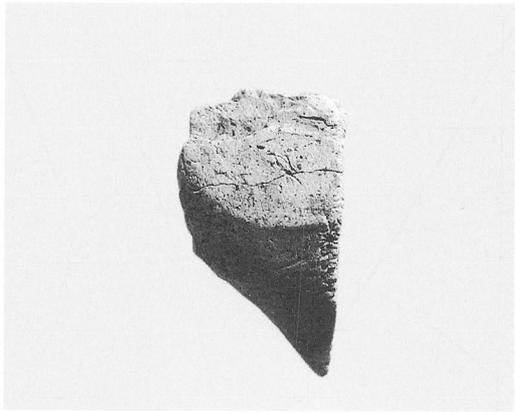
土師器 2



7



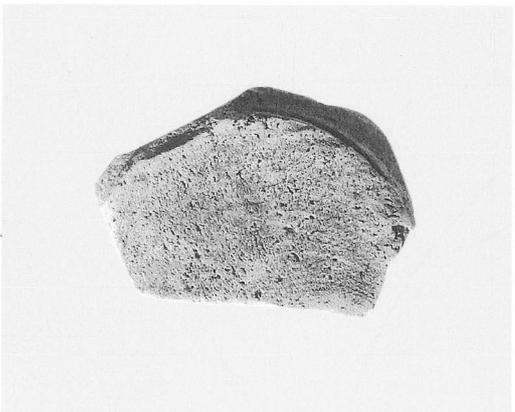
8



9



10

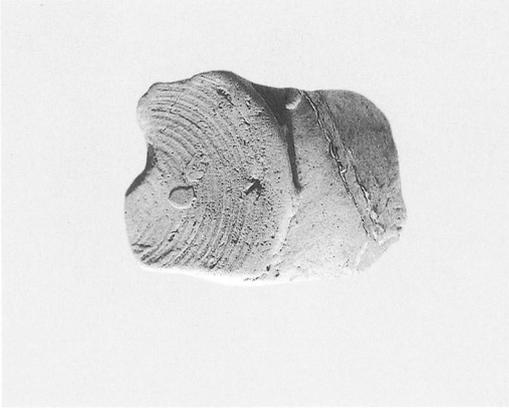


11

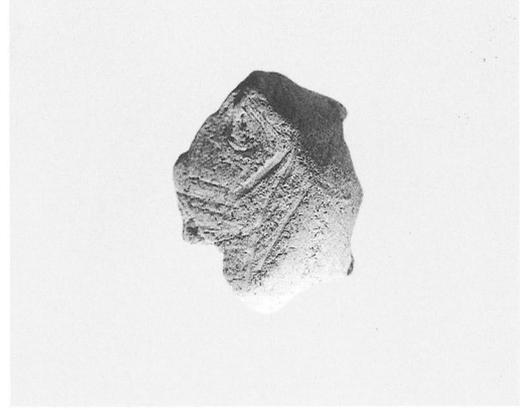


12

土師器 3



13



14



15



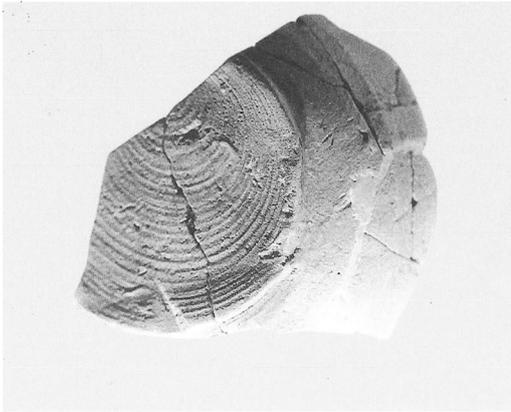
16



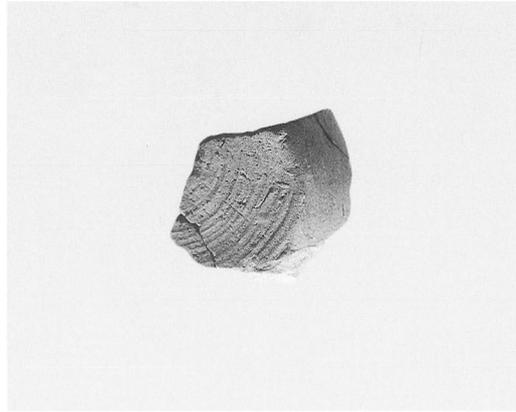
17



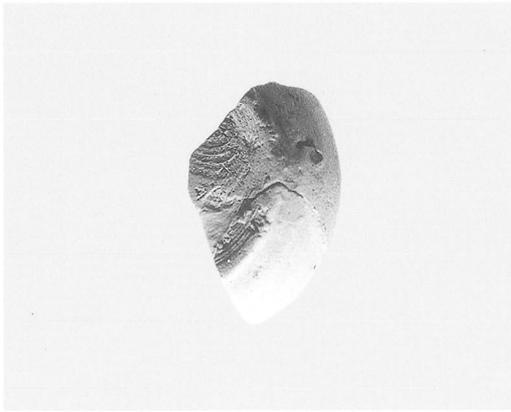
18



19



20



21



22



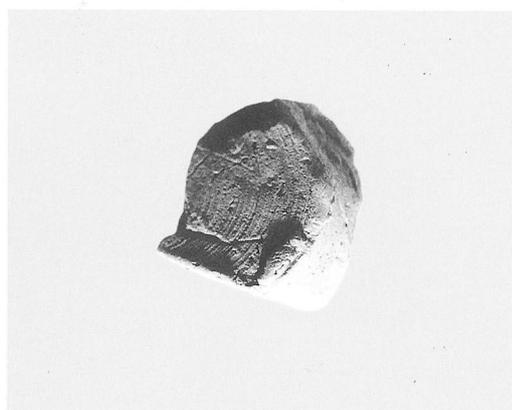
23



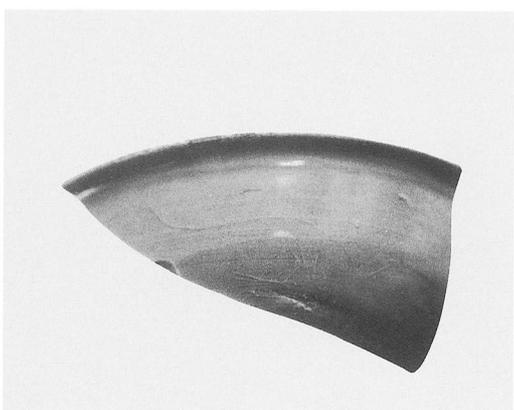
24



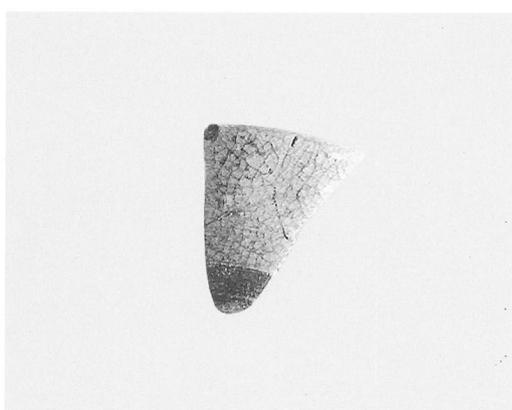
25



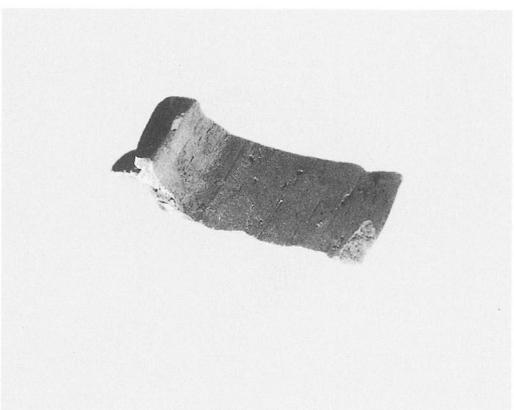
26



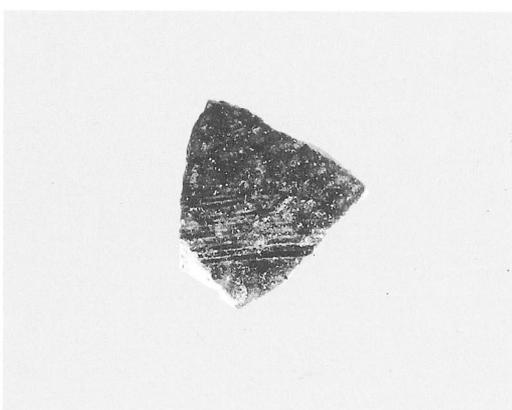
27



28

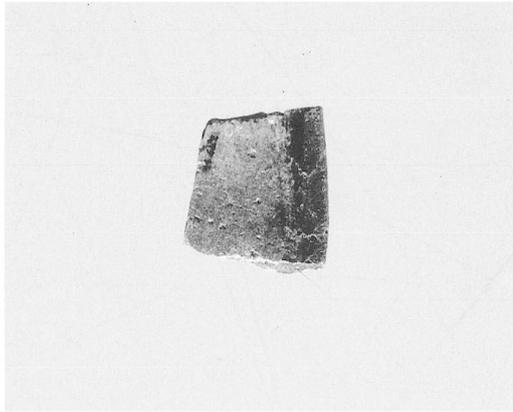


29

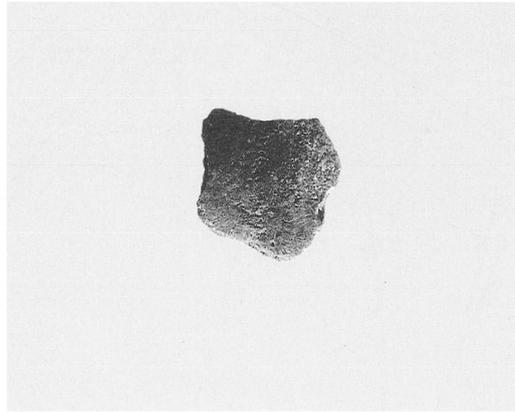


30

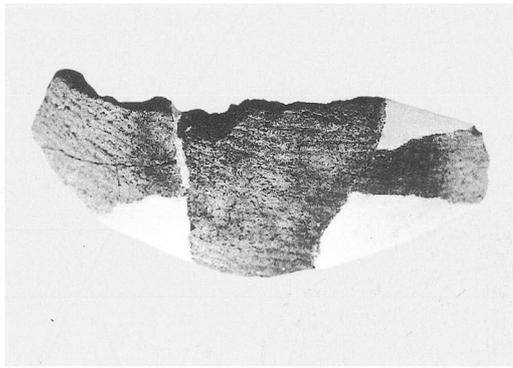
縄文土器



31



32



33



34



35

報 告 書 抄 録

ふりがな	みまたじょうほくとうくるわあと							
書名	三俣城北東曲輪跡							
副書名	国営都城盆地農業水利事業前方ファームポンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第97集							
編集執筆担当	柳田宏一							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019 番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2004年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みまたじょうほくとうくるわあと 三俣城北東曲輪跡	みやざきけん 宮崎県 きたもろかたぐんやまのくちちょう 北諸県郡山之口町 おおあざはなのき 大字花木1220-20	45342		31度 46分 24秒 付近	131度 09分 27秒 付近	2003.9.16 ～ 2003.10.31	750㎡	国営都城盆地農業水利事業に伴う前方ファームポンド建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	山城	中世	土塁 道路状遺構		土師器 (坏・皿・高台付碗) 輸入陶磁器 (青磁・白磁)		中世山城の曲輪と思われる遺構である	
	散布地	縄文	—		縄文晚期土器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第97集

三俣城北東曲輪跡

国営都城盆地農業水利事業前方ファームpond建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2004年12月20日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(76)0660

印刷 安藤印刷有限公司

〒880-0803 宮崎市旭2丁目4番4号
TEL 0985(25)3394 FAX 0985(20)7198
